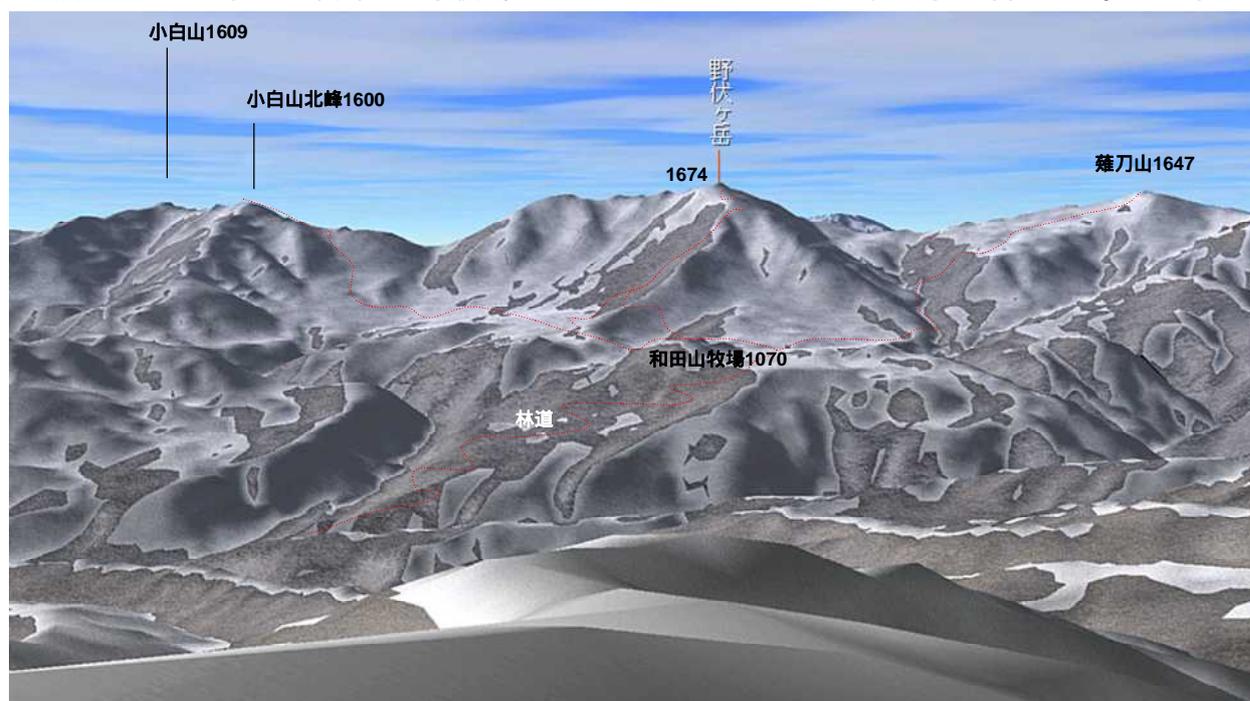




してくれる。また、この地域の山々は登りにスキーを使うのに適した地形を持っているので深いラッセルの代わりにシール登行が快適な点もスキー登山者にとって大きな魅力となっている。

長良川を遡り郡上八幡を過ぎてしばらくすると谷の北に真っ白な大日ヶ岳 1709m の稜線が屏風を広げてくる。白鳥まではあってもまだらな雪が町を北に抜け、上り坂に掛かると次第に雪深くなって、高鷲村に入るとそこは雪深い山国に変身する。鷲ヶ岳 1672m、大日ヶ岳にはスキー場が数箇所もある。急峻な斜面に切り開かれた道路を檜峠に登ると、峠の南北にも二つのスキー場が現れる。そして隠れ里と呼ぶに相応しい石徹白の谷が前方に展開する。峠あたりから眺める石徹白川右岸の三山、薙刀山 1647m、野伏ヶ岳 1674m、小白山 1609m は日本の山とは思えぬ白銀の山並みを誇示して登山者を迎えてくれる。石徹白スキー場を含めて俗化したとは言え、この景色を眺めていると心が洗われる思いだ。私がこの地域の魅力に引き寄せられたのは 10 歳と 8 歳になった子供たちを初めて山スキーに連れて行ったときのこと。家内と子供たちが壺足で私のシール登行のトレース跡を追う。家内を含めて 3 人分のスキーを担いで檜峠から水後山 1559m に登ったのは 1990 年 2 月 18 日だった。この時はま



だウィングヒルズのスキー場は開発されていなかったので水後山から峠下の道路まで楽しい滑降が待っていた。そして、石徹白谷の対岸に鎮座する三山、とりわけ野伏ヶ岳にはその形と全山真っ白な装いに強いインパクトを受けた。是非とも登らなければ、っと心に決意を秘めたものだ。そして、1994 年 3 月 13 日、成長した子供たちと家内をつれて野伏ヶ岳に挑戦した。和田山から野伏ヶ岳に向かって、左手の稜線からスキーを担いで壺足で山頂に立った。下りの滑降は忘れられないすばらしいものだった。そして、ACKU の皆さんにもぜひ紹介したいと思い、何度かの例会を持つことになった。石徹白の村から日帰りでも多くの峰に登る事ができるのだが、民宿「上村学」をベースとしたことにも大いに助けられていると思う。

今年(2006 年)も春先に ACKU の例会登山で、芦倉山 1717m に登った。その記録を ACKU News に掲載するにあたり、この際、この地域のスキー登山の足跡を振り返ってみた。

## (1) 白山・御前峰2702m

【1997年5月4日登頂 18名参加の内6名登頂、他は室堂で天候回復待】

ACKU 例会登山の白山は参加多数の盛会であった。京大 OB 組(平井、高村、阪本)、釣師自認組(田中俊、金井良)、大阪組(金井健、直木、小谷、居谷、山田、竹内夫妻、香山)、岐阜組(井上、井上 Jr)、それに大滝夫妻と関東から大竹口が参加した。5月3日は雨だった。市ノ瀬に集合し、そこから林道を別当出合まで歩いた。バス停には屋根がある休憩所があり、降りしきる雨の中、そこにテントを張った。翌5月4日、雨の中の登りとなった。スキーを背にしばらくは雪のない砂防新道を登ったがやがてシール登行となり、甚ノ助避難小屋で休憩。濡れた衣服を乾かす機会も無く登行を続けて室堂に到達した。ガスと風の中、小屋に入って休憩する。元気な6名(居谷、山田、大竹口、香山、井上親子)はガスの中、御前峰へ向かった。山頂でのひとは霧で眺望もなくそそくさと下りにかかる。這い松帯を下ったところのスキーデポでスキーを履いている丁度そのとき、サッと風が吹いてガスが晴れた。あのガスの中では滑降ルートの確認が難しかったであろう。ラッキー - な天候回復だった。スキーの腕前はバラバラだが、ザラメ雪はそれぞれに滑降を楽しめるコンディションで、大パーティの滑降乱舞は圧巻であった。(ACKU-news NO,23 1997.10.10 発行 第6回白山スキー登山 記事参照)

ACKUの現役山行として、白山は1966年5月15日から18日にかけて、リーダー富田、中園、徳田、金井の3年生4人で個人山行として実施。南から北へスキー縦走している。別当沢出合いから室堂、白山から清浄原、楽々新道を新岩間温泉へ。途中テントで3泊、楽々新道では快適なスキーを楽しんでいる。また、入山に際しては、富田が小松の太田先輩(故人)を前日に訪問し、白山情報を入手している。(金井良碩氏による情報)

## (2) 三ノ峰2128m、(3) 白山別山2399m

【1970年3月22日: 山本 井上】

列車がガタンと止まった。終点を告げるアナウンスで目覚めて慌てて登山靴を履き、リュックを担いでスキーを片手にプラットフォームに飛び出して驚いた。除雪された部分から背丈をずっと越した雪の壁が行く手を困っている。気持ちはまだ都会にあるのに、ここはもう雪の寒村ではないか。すっかり薄暗くなった越美北線の勝原駅は町から遠く離れた所にある。降りた乗客は私たちだけだった。改札口を出たら早速シールを貼って歩き出すことになった。橋を渡ってしばらくすると積雪は益々深くなった。下打波の村に入って、前方にボウッと青白い光が雪面に浮かんでいるのを見た。UFOではないか、と冗談を言いながら近づいたら、ズホッと深く深い穴に滑り落ちてしまった。「ギャッ! 宇宙人に捕まった」とふざけ半分に叫んで立ち上がると、そこは農家の玄関だった。街路の水銀灯が足元にあったのだ。積雪3mは優に越えていた。その夜はその農家に泊めてもらった。おばさんの手作りの蕎麦は卵を繋ぎに山芋をたっぷりすり込んだ栄養満点のものだった。次の日からラッセルを3日間続けて三ノ峰の西稜線に到達、そこに雪洞を掘ってアタックキャンプとした。延々と続くアプローチでエネルギーが続いたのはおばさんの蕎麦のお蔭だと今でも信じている。



別山、石徹白大杉尾根の頭から

烈風吹きすさぶ中、雪洞を抜け出した。稜線の深いラッセルを続けて三ノ峰 2128m に到達。避難小屋でカチカチに凍ったオーバーミトンをはくして、ともすれば萎えてしまいそうな気持ちを奮い立たせて別山 2399m を目指した。すでに下り坂になった天は咆哮し、益々強い風を鈍色の空に吹き荒れさせていた。計画では白山を狙っていた

のだが、別山頂上から眺めた白山は遙か彼方に天国の峰のごとく見えた。そして白山は断念した。一度逃がした登頂の機会はなかなか巡ってこないものだ。白山御前峰の山頂を踏んだのは 19 年後、1989 年 7 月だった。



左から三ノ峰、二ノ峰、一ノ峰 願教寺山 1690.9m 東のコルから

一夜明けると晴天、雪洞を捨てて尾根から沢の急斜面を滑降。ザザッと表層雪崩を起こしつつ何度かのターンで樹林帯に逃げ込んだ。谷をトラバース、上小池の廃村に降り立った。小学校の校舎の二階に入り込んだら、そこは夏場の山仕事のねぐらになっていた。山本が空の一升瓶が 10 本入っている木箱を見つけて丹念に一本ずつ酒が残っていないかチェックしたのを覚えている。中身があったか

なかったか記憶がない。勝原へは去った寒波の置き土産、湿雪と道路を襲う雪崩に何度も行く手を阻まれながらの下山だった。

#### (4) 大日ヶ岳 1709m

##### 平井一正先生退官記念スキー登山

【1995年3月18日:平井、横山、金井健、直木、田中俊、中園、金井良、金井直、緒方、和光、居谷、山田、中川、坂本淳、岩井、大竹口、長谷川、松村、尾崎、村山、竹内鉄、杉本、井上達】

平井先生の退官記念を冠にして皆さんに集まってもらおう作戦だったが、見事に総勢 23 名が山に集合した。これを皮切りに石徹白のスキー登山が盛んになった。登りはダイナランド・スキー場からの一般ルートを通った。11:50 出発、13:45 に登頂。岩井は壺足で登ったので皆と別れて一足先に下山して行った。下りはスキー場の北縁の東に延びる尾根よりさらに一本北の尾根を蛭ヶ野高原方面に下った。雪が腐ってずいぶん苦勞した。カモシカが飛び出したりして深山の雰囲気を楽しんだ山だった。17:10 下山。(ACKU-news NO,21 1995.10.10 発行 平井先生退官記念山行 記事参照)

大日ヶ岳登山の翌日(1995年3月19日)、和田山まで全員で登り、そこから薙刀山、野伏ヶ岳、小白山の3隊に別れて、所謂放射状登山を実践した。金井健二はスキーの不調で和田山から引き返した。

##### 再び大日ヶ岳へ

【1996年3月9日 :平井、直木、壺阪、田中俊、金井良、緒方、長谷川、井上一家4人】

昨年に続き大日ヶ岳を滑ることとなった。前回は雪が悪くて楽しめなかったせいか、再び挑戦することになった。(ACKU-news NO,22 1996.10.10発行 第二回石徹白スキー 記事参照)

東海北陸自動車道の開発が進んで蛭ヶ野高原や高鷲村へのアプローチが簡単になったせいか、ダイナランドの北、我々が楽しんだ樺の原生林はスキー場(高鷲スノーパーク)になってしまった。経営が別で競り合っているのか、隣接しているにもかかわらず同じチケットで行き来することは出来ない。リゾート開発は山村に現金収入をもたらすのだが、欲望を露に進めて何かを置き忘れている。自然を保護し長期にわたってスキー人口を維持していく努力をしてほしいものだ。スキー人口は減少しているのだからもっとスキーヤーを大切に、山スキーもスキーの範疇に入れて自然保護とともに安く楽しめる環境を作って、子供たちに提供していくべきだと思う。もう二度とあの新雪の林の滑降が楽しめないと考えると寂しい。ある日、このスキー場でカモシカに出会って驚いた。彼らも突然のスキー場の出現に戸惑っているのだろうか。

#### (5) 毘沙門岳 1386m

【1996年3月10日 :平井、直木、壺阪、田中俊、金井良、緒方、長谷川、井上一家4人】

大日ヶ岳登山の翌日はすばらしい快晴の朝を迎えた。石徹白の谷を囲む山々は純白の衣装をピンクに染めて我々の心を引き付ける。今日は全員で毘沙門岳に登り、北西の石徹白スキー場に続く尾根の東の谷を下るルートを滑降する事に決まった。(ACKU-news NO,22 1996.10.10発行 第二回石徹白スキー 記事参照)

#### (6) 水後山 1559m

【1997年3月8日 : 平井、直木、田中俊、坂本、壺阪、金井良、金井 Jr、西内、井上、井上 Jr】

大日ヶ岳 1709m から水後山 1559m にかけては近年植林前線が延びつつあるもののまだまだ樺の原生林が残っている。日本の山は樺が残っていると春夏秋冬楽しむことが出来る。冬は樺林なら雪崩の心配がない。思う存分新雪の滑降が楽しめる。春は樺の若葉が茂ってもまだ遅くまで残雪が残り、あちこち自由に歩き廻ることができる。夏は厳しい日射を避けて涼しい登山道を提供してくれる。そして、秋。何ととっても樺林の紅葉は日本の秋山を象徴するものだ。木の間を通して新雪の来た白銀の高山と紺碧の空をバックに見上げて樺の実を拾うのは移り行く季節の大きな楽しみだ。この地にはそんな自然がまだ残っている。

ウイングヒルズ白鳥リゾ - トと言うスキー場が桧峠の北に出来てから静けさがなくなった水後山だが、ゲレンデの東端をシール登行しゲレンデを抜けると樺の大木が疎らな稜線となり、雰囲気が一変する。我等山スキー派の領域だ。稜線は少し吹雪いていたが、硬くクラストした稜線の雪面にエッジを効かして山頂に立った。山頂の西のコルから石徹白に向けて谷が広がっている。出だしは急傾斜の谷だが、あとは広い植林された谷が村外れまで続いている。雪庇をジャンプして谷に飛び込んだら若いカモシカが驚いて駆け下っていった。(ACKU-news NO,23 1997.10.10 発行 第5回石徹白スキー 記事参照)

## (7) 野伏ヶ岳 1674m

【1995年3月19日：緒方、居谷、長谷川】

石徹白で山スキーをする人達は必ずこの山を目標に選ぶ。それほど姿良く、またスキー滑降の意欲を掻き立ててくれる装いをしている。和田山から正面に見上げる三角錐の左右の稜線が、雪の状態が良ければ正面の壁が登路となる。手強そうに見えるせいか、今回は少数が挑戦することになった。時折吹雪く悪天ではあったが、三人は左手の稜線を登路に選んで見事に登頂を果たした。(ACKU-news NO,21 1995.10.10 発行 平井先生退官記念山行 記事参照)

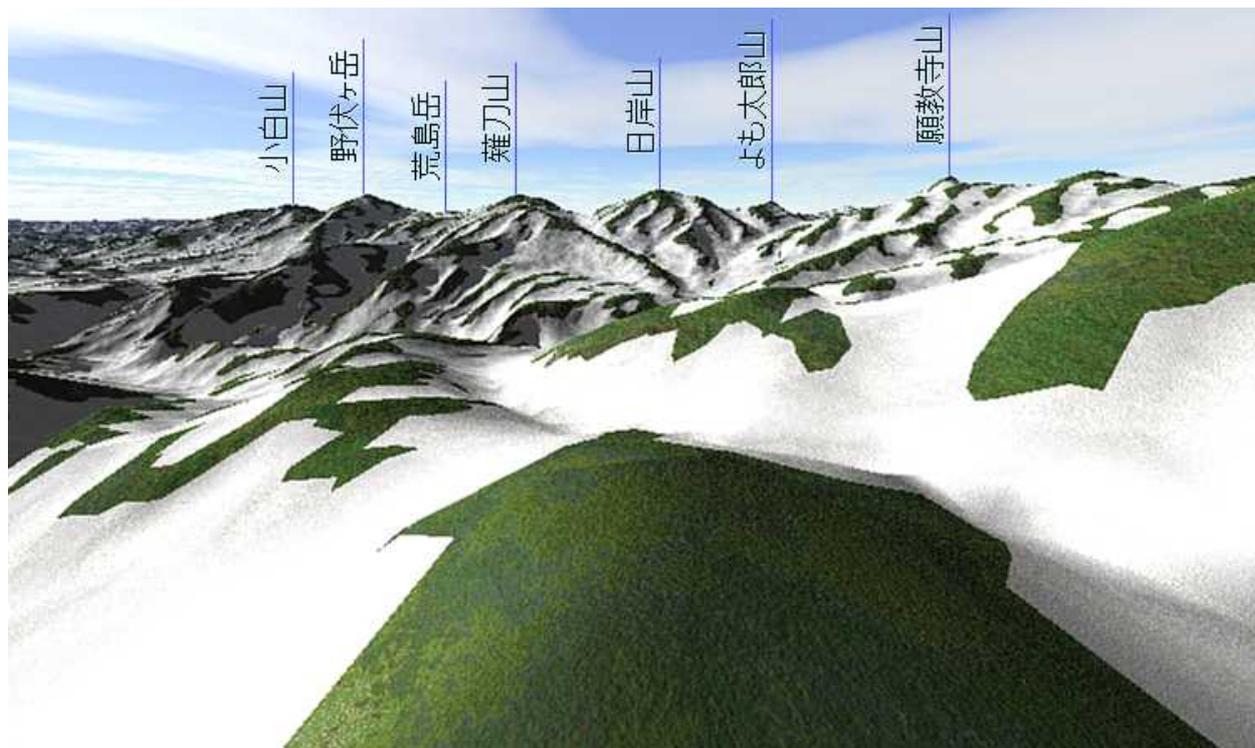
【1997年3月9日：平井、直木、壺阪、坂本、西内】

一昨年は眺めるだけだったので心に期するものがあつたと思われる。5人が目標を野伏ヶ岳に置いた。今回は晴天に恵まれて山頂からの展望もすばらしく、スキー滑降は言い訳の聞けないコンディションだった。小白山方面から野伏ヶ岳を滑降する5人のシュプールは美しく、楽しそうな雰囲気が遠くに伝わってきた。



## (8) 薙刀山1647m

【1995年3月19日: 平井、直木、横山、大竹口、竹内夫妻、尾崎、松村、金井直、井上一家の4人】  
石徹白の宿(民宿上村学)に合流した井上の家族3人(涼、裕、恒)を加えて13人のパーティが薙刀山へのアタックに参加した。金井直樹君は父良碩氏と別れて薙刀山に参加した。9:10、和田山で3パーティに別れて野伏ヶ岳1674m、小白山1609mと、それぞれのピクを目指した。吹雪中13:15登頂。シールを剥がして滑降のために金具を調整する時は厳しい環境に晒されたが、竹内夫妻が金井直をよく助けてくれて皆が楽しく滑降することができた。私は先頭で吹雪中、下降ルートを間違わないように滑ることに神経を使ったが、全員うまく和田山に下ることが出来、ここで3パーティが全員集合して推高谷の林道を下った。(ACKU-news NO,21 1995.10.10発行 平井先生退官記念山行 記事参照)



銚子ヶ峰1810m頂上から小白山1602.2m、野伏ヶ岳1674m、薙刀山1647m、日岸山1669m、よも太郎山1581m、願教寺山1690.9mの稜線を見下す。

後方中央は荒島岳、右手は経ヶ岳 (2010/4/24)

## (9) 小白山1609m

【1995年3月19日: 田中俊、金井良、和光】

薙刀山パーティが吹雪の中を頂上まで頑張っている頃、橋立峠で稜線の季節風をまともに受けて小白山のアタックは断念した。賢明な判断であった。野伏ヶ岳も薙刀山も主稜線の東側に登路があり、吹雪をまともに受けるのは山頂付近のみだった。小白山はコルから南に主稜線を登るので事情は全く異なっていた。(ACKU-news NO,21 1995.10.10発行 平井先生退官記念山行 記事参照)

【1997年3月9日: 田中俊、金井良、金井Jr、井上、井上Jr】

田中、金井は雪辱戦だ。今日は良い天気、目指す小白山の斜面は眩いばかりに真っ白だ。少しの新

雪はシール登行にはもってこい。カモシカの成獣がわれ等の行く手に足跡を付けて行く。振り返り、振り返り我々を観察する。主稜線のコルへの登りに掛かる頃、やっと近づいて写真を撮ろうとしたら、スタコラと尾根の向こうに去っていった。

幸い、コルには雪庇も張り出していなかった。急傾斜をジグザグに登って広々としたコルに到達。ここでスキーをデポして壺足で北峰に登る。クラストした斜面のキックステップは脛脛にきつい。登頂を皆で喜んだら早速下りに掛かる。硬い雪面のヒールキックは結構緊張した。コルからの滑降は今日のご褒美だ。快適なターンを繰



願教寺山1690.9m 東の小ピクより

り返して山腹を下り、和田山へのトラバースに流れ込んでいった。

(ACKU-news NO,23 1997.10.10 発行 第5回石徹白スキー 記事参照)

## (10) 芦倉山1717m

【2006年3月26日：豊田、高田、小宮、矢崎、橋本(HNA会員)、井上】

芦倉山1717mへは保川林道から石徹白谷の東主稜線、1350mコル経由のルートを選んだ。記録によると芦倉山から西に下り、さらに南に向きを変えて保川に消える尾根をルートに選んでいるパーティも多くある。登りに使うには取り付きの傾斜がきつくて苦労しそうだ。パーティの平均年齢を考えて行程は長いが全体に楽しそうな保川林道を詰めるルートを採択した。



石徹白中在所あたりから見る初河山 1613m と芦倉山 1717m(右)

#### 7:05 民宿出発

民宿は中在所の南はずれにある。上在所までは生活道路で除雪されている。上在所の中居神社には参拝客の駐車場があるものの台数が限られているし、釣り客も入っているだろうと推測して、我々も車の台数を減らして民宿を出発した。

#### 7:25 上在所 白山中居神社

神社の鳥居から先は除雪されていないのでここで出発の準備をし、雪の上に出る。残雪の壁は高いところでは2m以上はある。この二三日の暖気と日差しでずいぶん雪が解けて嵩も減少したように思う。壺足では弛んだ雪を踏み抜いて太腿まで落ち込んでしまうところもある。さっそくシールを貼ったスキーの活躍だ。

#### 8:10-8:20 牧川出会 林道が右岸に渡る橋の手前

クラストが解け始めている雪面は昨日までのスキーとワッパのトレースの固まった跡を残しているが、まあまあ歩きやすい部類だ。山側から雪の重みで倒された枝が林道のあちこちで歩行の妨げになる。場所によっては地肌の出た流れが林道を横切っていたりして快調に進めるわけではない。45分ピッチで進んだ距離から登頂時間を推定すると午前中には頂上に到達できそうもない。

#### 9:10-9:20 保川林道 970m 林道がS字に曲がっての登ったところ。

#### 10:10-10:20 保川林道 1140m 林道が左岸に渡ってS字に曲がったところ。

3ピッチの林道歩きでやっと標高1000mを越えた。シニア組も遅れずに進んでいる。高田さんが少し遅れ気味だが全体のブレ・キになっている訳ではない。ようやく稜線が近づいてきたが、山頂はまだまだ遠くにある。芦倉山からは保川に3本の沢が下っているが、どれも沢の源頭には大きな雪庇が張り出している。崩壊して雪崩を起こした跡もある。谷には亀裂が多数見られた。二三日前の下界の雨は標高1000m以上では雪だったようだ。黄砂で汚れた古い雪に新雪が積もって山の上部は白

く輝いている。このあたりの積雪は3-4mを超えているようだ。あたりはまだ冬の装い。今年は豪雪の年だったと言ってよい。一番奥の沢を詰めるルートも頭に描いていたが、気温が高いし積雪も尋常ではないので危険を感じて忠実に稜線を辿ることにした。この先は地図では林道がなくなる。林の中に入ってすぐ、沢に下ってルートを求めた。檜の植林が密生していて雪面がデコボコでスキー登行には快適でない斜面に入ってしまった。ジグザグに登って主稜線に出ると植林の向こうは樺の疎林だった。

11:10-11:20 主稜線 1390m

1350mの最低コルに出ずに少し上に出た。行動食のおにぎりは美味しい。石徹白の上村さんの弁当はいつも副食の漬物も旨い。

ここからは樺の原生林が広い稜線を包んでいる。スキー登山に理想的な雪の斜面が続く。シールを効かして登るために描いたジグザグのスケッチを頭にそのとおりに進んでいくことが醍醐味だ。スキー登山が止められないのはこんな自然があるからだ。このような場所は下りの滑降も思い通りにシユプールを描くことができる。但し、今日は気温が高すぎるのできっと下りは腐った雪にテールを捕られて七転八倒があちこちに見られそうだと思う。

12:00 主稜線 1600m

頂上への最後のコブは長い肩になっていた。少し遅れた高田さんを待って再び頂上を目指す。巨大な雪庇に守られた雪のドームとなった山頂は樹木もすっかり埋もれていて神聖なる石徹白の神々の一柱のように見える。雪庇を避けるように左に廻りこんで最後の斜面を登ると鈍色の空に灰色の山々が北面に連なって現れ、広い頂上に着いた。私に続いて山頂には豊田大先輩が登ってこられた。今日のパーティの最年長68歳にしてこの元気であった。



芦倉山 1717m 頂上にて

12:25-13:00 芦倉山 1717m頂上

白山別山はもうガスの中だった。三ノ峰 2128m、銚子ヶ峰 1810m、丸山 1786m と続く山々は鈍色のキャンバスに銀灰色の姿を描き出している。「芦倉山 1717m からもう一歩も近づくではないぞ」と怒りを表しているようだ。石徹白谷の西の三山、薙刀山

1647m、野伏ヶ岳 1674m、小白山 1609m は凹凸のない墨絵のようだ。大日ヶ岳 1709m は白い日傘のように両翼を広げている。石徹白の山も大体登りつくしたが、とっていたが、今回芦倉山 1717m

を選んで改めて調べてみるとこれは立派なピークで登り甲斐のあるものだと判った。今、山頂に立ってその存在感を改めて味わっている。下り坂の天気もなんとか持ちこたえてくれた。

13:20 コル下 1300m

長かった登りでスキー滑降の体力が残っているのを願いつつ山頂を後にした。山はスキー技術もそれなりに必要だが、体力の温存が勝負だ。雪質も大きく影響する。懸念したとおり、雪は腐った。コルまではそれでもシュープの出来る程度の腐り方だったが、後はいけません。ズボッとスキーが潜ってしまい、登りのトレースを使って下るしかなかった。

14:42-15:00 牧川出合

主稜線からは植林の中の絶望的な下りが待っていたが、幸い、新しい林道に出くわした。しばらくこれを伝ったが、下を向いてのラッセルはつらい。適当な所から登りに使った沢に下ってトレースを伝うことにした。延々と続く林道を 2 ピッチ、中居神社に到着した頃は靴下の組合せを失敗した両足のマメが潰れて真っ赤な足がスキー登山靴から出てきた。高田さんが林道で転倒して固いザラメ雪で鼻っ柱に傷を作ったのと、倒れた枝を避けようとして林道から危うく川に転落しそうになってその枝にぶら下がり悪戦苦闘の末にサバイバルした豊田さんがいたことを記録しておこう。

15:25 中居神社

地図をごらん頂きたい。10 山に我が ACKU がスキー登山の足跡を残したのだが、まだ石徹白谷の最奥のピーク銚子ヶ峰 1810m を中心に願教寺山 1691m、よも太郎山 1581m 丸山 1786m などがまだ手付かずに残っている。いずれも石徹白から日帰りはきついので簡単ではなさそうだが、魅力にあふれた山々である。元気な会員が挑戦されるのを楽しみにしたい。(敬称省略させていただきます)

## (11) 銚子ヶ峰 1810m

【2010年4月24日：井上恒・裕未枝夫妻、(新婚さんとの春スキ-) 井上達男】



西のコルあたりから見上げる銚子ヶ峰 1810m

石徹白谷の盟主である銚子ヶ峰 1810m がまだ登られていなかった。これは積年の課題であるが、解決の機会が意外なきっかけから訪れた。我が息子夫婦はかなり熱心なスキーヤーであるが、最近、ゲレンデに飽きてバックカントリースキーに目覚めた。息子は子供の頃から良く山スキーに行ったが、自分で計画して行く楽しみを覚えたようで、お誘いがかかった。

前日夜、新婚さんたちは多治見出発。私は近江八幡出発で、

石徹白へ。中居神社の駐車場でゆっくり睡眠を取ったので元気な朝を迎えることが出来た。

**6:20 石徹白大杉 駐車場出発**

ラッキ - なことに連休開通の林道が昨日、大杉駐車場まで開通した。駐車場で出発準備して早速急坂の登りに掛かる。スキ - はアルペントラ - ゲンでアタックザックの肩紐にぐっと加重がかかる。登山道は硬い残雪に覆われていてキックステップがきつい。

**6:38 大杉**

大杉でアイゼン・ワッパのシニアのパーティに追いつかれる。丸山が今日の目標だとのこと。大杉は縄文杉を思わせるような老木だ。

**7:18-7:30 1250m 稜線 休憩**

登山道は半分雪の下だが、稜線はスキ - が使えない。アイゼンを着けない我々はアイゼンを装着した丸山パーティに置いていかれる。

**7:44 1310m スキ - 装着**

やっとスキ - が使える。ここまで登るとまだ残雪がたっぷりだ。休憩ごとに美味しいものが出てくる。石徹白川右岸の山々が樹間に姿を現す。

**8:00 1400m 急坂手前でスキ - を外してアルペントラ-ゲン**

再び急斜面になるが登山道は凍てついているが雪はほとんど消えている。歩きにくい。道の両側は笹が覆いかぶさっている。

**8:25-8:38 急坂を登りきって再びスキ - を履く。**

ここから避難小屋までは快適な雪面のシル登高だ。小屋は中に入って見なかったがしっかり整備されている様子だ。

**9:35-9:48 銚子ヶ峰手前のピ - クにある母御石下の急斜面で一休みしてスキ - を外し、トラ - ゲン**

雪がザラメ雪に変わってシルの利きが悪くなった。急斜面はきつい。斜面を登りきると頂上までは広い笹原の中に夏道が現れていた。そのままトラ - ゲンにて頂上に達する。振り返ると丸山 1786m、芦倉山 1717m が立派に見える。



三の峰 2128m(左)と白山別山 2399.4m (銚子ヶ峰 1810m 頂上にて)

10:15-11:00 672 銚子ヶ峰 1810m 頂上

頂上の眺めは抜群に良い。北には三の峰から白山別山が眼前に展開する。南西には願教寺山 1690.9m、よも太郎山 1581m、日岸山 1669m、薙刀山 1647.2m、野伏ヶ岳 1674m、小白山 1602.2m の連なった稜線が眼下に展開する。その向こうには経ヶ岳 1625.2m、赤兎岳 1628.7m、大長山 1671.4m が並んでいる。



若夫婦は今シ - ズンに野伏ヶ岳 1674m、薙刀山 1647m、日岸山 1669m、よも太郎山 1581m、願教寺山 1690.9m にすでに登っている。恒君は過去に野伏ヶ岳 1674m、薙刀山 1647m、毘沙門岳 1385.5m、小白山 1602.2m、水後山 1558.5m と大日ヶ岳 1709m にも登っているので今日の銚子ヶ峰 1810m の登頂ですっかりこの石徹白山スキ - の通になった。裕未枝さんが手作りの弁当、おにぎりやサンドイッチなどを沢山持ってきてくれていて休むたびに沢山頂いた。

**11:21-11:31 P1784m**

銚子ヶ峰 1810m 頂上から来た道を引き返すか、願教寺山 1690.9m 方面を廻って石徹白谷に下るかで恒君と議論する。新婦さんの技量が分からないので石徹白川に下るのをためらった。また「未知の谷は下るな」という山の掟を考えて躊躇したのだが、恒君が先週に仕入れてきた情報などを少し参考にして石徹白川の奥の二股や大滝のゴルジュ地帯の通過を心配しつつもラウンドを決心した。P1784 までは左手の斜面は笹が出ていて滑り込めないで石徹白谷の源頭である P1784m まで所々露出している夏道伝いに進んでピークでシールを外してスキーを履いた。

**11:42-11:58 願教寺山への稜線の最低コル**

標高差 200m の広い斜面の滑降は今日のハイライトだった。Video にそれぞれの滑降を記録しつつ下る。

今日の滑降のハイライトはさらに願教寺山南東斜面の大トラバ - スと石徹白川の源流に下る谷の滑降の三つだ。

コルで一服、ここでも美味しいものが出てきた。快晴だった空模様が怪しくなってきた。北西の風が冷たい。樹木に海老の尻尾もついている。黒雲が小雪を運んできた。しかし、大きく崩れることはなさそうだ。ここ石徹白川の源頭は広い雪原で樹木もまばらであり、我々だけで独占している桃源郷だ。どうせ降るなら少し積もってくれたら楽しい新雪の滑降になるのだが。シ - ル登高でコブを二つ登ってそこから願教寺山東南斜面を大斜滑降で西俣源頭にトラバースす



る。目指す澤の源頭部は既に新婚さんたちが稜線から偵察済みであるのとにかく他の澤には色気を出さずに二つばかり尾根を越す。最後は少し登りになったが大したことはなかった。うまく願教寺山をバイパスすることが出来た。

**12:46-12:59 願教寺山南稜**

銚子ヶ峰の頂上でお腹を下したが再び便意を催し裕未枝さんにティッシュをもらう。

**13:03-13:06 笹藪を漕いで石徹白川源流の滑降地点**

先週はもっと雪が多く残っていて、藪漕ぎはほんの少しだったと言う。ここで再びスキ - を装着。

さて、二股まではたっぷり残雪があり、楽しい滑降で新婦さんの嬌声が谷に木魂する。ウェ - デルンに丁度良い傾斜と雪質。疎林の中を思い思いに滑って林道終点あたりに到達。すでにスノ - ブリッジは切れて沢が出ていた。倒木を利用して初めの渡渉は濡れずにすんだ、と思ったが、10cm くらい水流の中に足場を求めた右足のスキ - 靴に浸水。登山靴とは違うことを発見。

### 13:28-13:45 奥の二股、渡渉地点

林道はどうやら廃道となっているようだ。二股の下流、北から澤が一本流下してくる出合いから河岸段丘とその下のゴルジュ帯のある地形となる。右岸谷底の林道跡はすっかり雪に覆われていて傾斜面が水流まで続いている。しっかりエッジを利かして斜滑降で笠羽谷の出合にあるはずの橋まで下った。



第一渡渉地点



第二渡渉地点

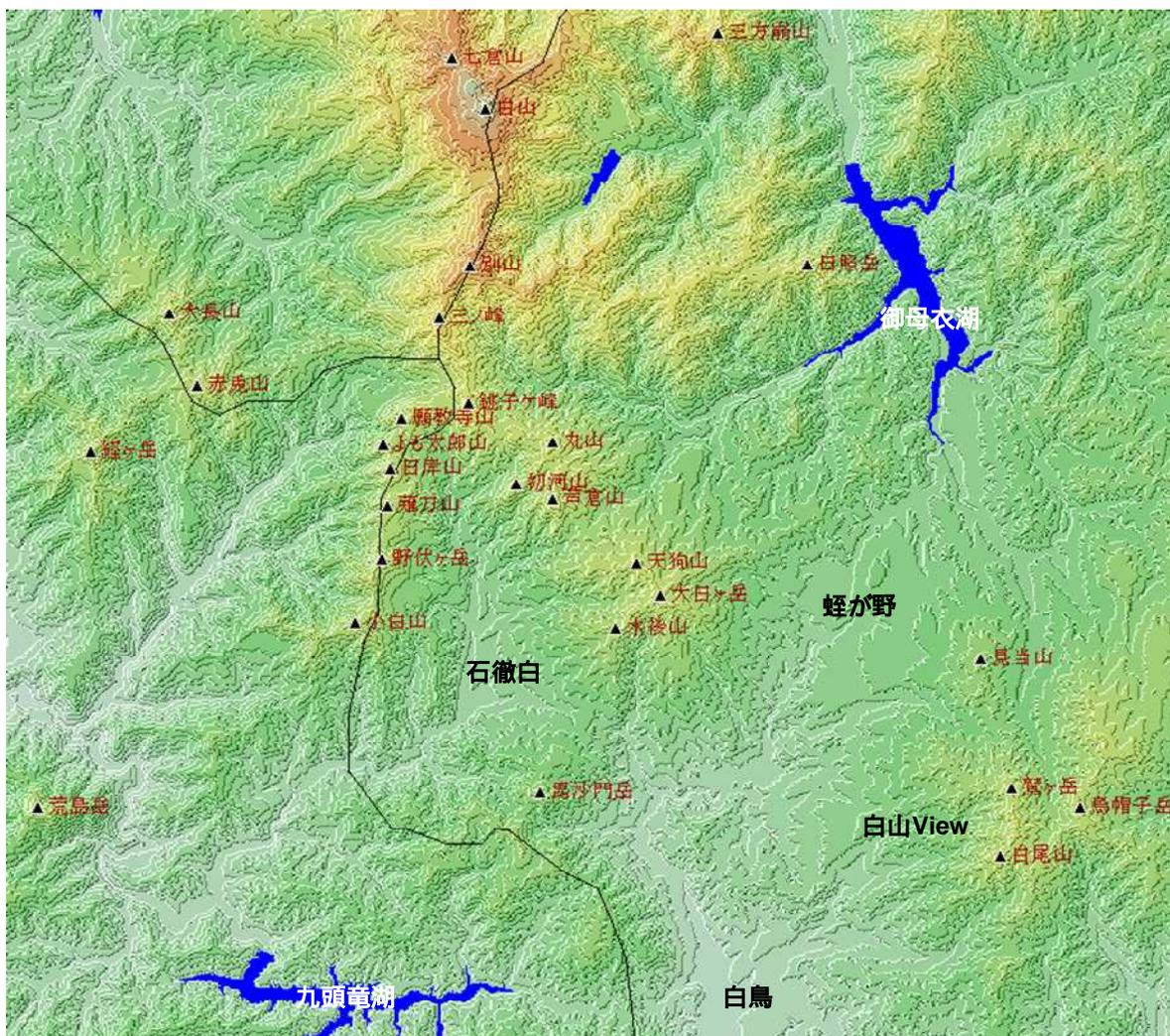
### 14:02-14:12 笠羽谷の出合 渡渉

出合に確かに橋はあった。しかも立派なコンクリート製の橋だ。だが、廃道になって久しいのか上流側の袂が水流に削り取られて流れが二股になっている。すなわち膝ぐらいの深さの速い流れが行く手を遮っているのだ。底の石も不安定だ。安全のために靴のまま渡渉することに決めた。

「未知の谷は下るな」とは先輩に教えてもらった格言である。但馬の仏の尾から秋岡にスキ-で澤を下ったときは氷結した滝をスキ-を履いたままアップザイレンしたことがあった。この格言はやっぱり正しい。

出合から石徹白川左岸の廃道伝いに歩いて下る。最近の雨でブロック雪崩や土砂の崩壊が所々ある残雪の斜面を下っていく。右手の谷に落ちないように慎重に歩く。左手の急斜面からは落石と雪のブロック崩壊を心配しつつ、それでも順調に下って無事に石徹白大杉の駐車場に帰着。

### 14:54 駐車場帰着



終わりに

2006年に芦倉山 1717m に登った後、は区山や石徹白のスキ - 登山について一文をしたためた。今年(2010年)、石徹白谷の盟主、鉾子ヶ峰 1810m に登る機会を得たので当時の文を引っ張り出して改めて手を加えてみた。 井上 達男